

# 乳幼児の表現活動と図画工作を繋ぐ粘土活動の 系統的な指導についての一考察

浅 野 卓 司

A Study about Systematic Instruction of the Clay Activity which Connects Arts and Crafts  
with Arts Activities in Infants

Takuji ASANO

## 1. 問題と目的

本研究は、幼児期の終わりまでに育ってほしい姿として、造形的な体験において保障される活動とは何かを探るものである。そこで表現領域の活動と小学校図画工作を繋ぐ学びの連続性という観点から粘土活動に着目し、そのねらいや内容について分析を行う。

幼児期と児童期を結ぶ体験は、造形活動に限らず一連の発達における学びとして捉えられ、近年は5歳児後半の「アプローチカリキュラム」や小学校低学年の「スタートカリキュラム」などの教育課程等の編成が図られている。「アプローチカリキュラム」が位置づけられる5歳児後半は、人間関係の深まりや協同的な活動から、深く考える力の芽ばえや様々な興味関心の深まりが育つ発達の時期と重なっている。学びの連続性における体験の連続性を、育ちののりしろとして捉え、カリキュラム等で保障していくことが、興味関心に基づく主体的な学習態度の育成へ繋がっていくこととして期待したい。

## 2. 研究の背景と方法

平成30年度4月から施行される幼稚園教育要領、保育所保育所保育指針、幼保連携型認定こども園教育・保育要領と、それに続く平成32年度実施の小学校学習指導要領では、乳幼児期から小学校に繋がる学びを「資質・能力」として、学力三要素（「知識及び技能」、「思考力、判断力、表現力」、「学びに向かう力、人間性」）の視点から捉える点に特徴がある。この視点は、高等教育までを貫く教育の指針として示され、乳幼児期においては、様々な体験を通して身につく力を見据えた、より良く生きる生涯学習の立脚点となっている。

平成29年告示小学校学習指導要領は、図画工作を含む全ての教科目において、教科の目標や内容に学力三要素の視点が反映されるようになった。粘土の題材は、表現領域における造形遊びと絵や立体、工作に表す活動、鑑賞領域にも関連している。従来の評価の観点でいう発想・構想の力は、表現と鑑賞領域（平成20年の改訂で示された〔共通事項〕を含む）において、

思考力・判断力・表現力という位置づけとなった。さらに、表現領域には技能、鑑賞領域は知識に該当する項目が精査され、評価の観点を含めた目標・内容として改訂された。

この改訂は、従前の教科観を大きく覆すものではなく乳幼児期から小学校を貫く課題を含んでいる。そこで本研究は、平成20年改訂の学習指導要領、図画工作教科書や指導書を参考にしながら、造形表現における粘土の活動に着目し、子どもの体験や指導の連続性や非連続性の部分を明らかにしたい。具体的な方法としては以下の3点から考察を行う。

- ① 乳幼児期から小学校における粘土活動の課題
- ② 図画工作における粘土を材料とする題材間の関係性
- ③ 図画工作と他教科との横断的視点からの検討

### 3. 乳幼児期から小学校における粘土活動の課題

粘土は、材質が乾燥し硬化しない間は可逆操作ができるため、自分がイメージしたものと異なる場合には何度もやり直しができる材料である。そのため、作りながらアイデアが膨らんでいき、制作当初の構想から大きな変化が生じることがある。こうした特徴は、描画活動ではあまり見られず、訂正したい場合には白紙の状態から改めて描き直すか、意図にそぐわない箇所を上から描き足すことになるため何度も繰り返してやり直すことは難しい。小学校における粘土の活動は、造形遊びや立体、工作等の領域に作例が見られることから、造形材料としての汎用性が高いことを示している。ここでは、第一に乳幼児期から小学校において展開される粘土活動の課題について整理しておきたい。

#### (1) 乳幼児期における粘土活動の課題

乳幼児期から小学校に繋がる造形表現には、見たりや聞いたりすることの直接的な体験活動を通して、感じたことを造形的な視点で捉えたり表現することを楽しむという特徴がある。指導の観点としては、活動を通して主体的に関わる力や感性が豊かに育っていくことを重視しており、表現行為に至るまでの豊かな経験は、知的探求活動が生まれる動機付けとなっている。そして、日常生活における様々な美的体験は、造形的な見方や捉え方を育てることや造形・美術の役割について気付く姿勢を育てることを目的としている。造形活動における粘土の活動もまた、こうした捉え方が背景にある。

乳幼児期の造形活動で用いられる粘土には小学校で扱う材料と重なる点が多い。粘土の種類としては、自然材料である土粘土がある。これ以外には、小麦粉粘土、油粘土、紙粘土などの人工粘土も扱われている。本研究において取り上げる粘土<sup>(1)</sup>は、国際土壌学会法で規定される、土壌粒子の大きさが0.002mm以下のものや、Wetworth (1922) が定義する0.0039mm以下の土壌を指すが、土粘土は、水分を加えることで触感が変化し、人工粘土においても粘性や粘着性があり自在に変化もする性質を持つ。こうした高い粘質は、造形教材として用いられているい

ずれの粘土においても共通するものである。

乳幼児期の粘土造形の中で、特に土粘土に触れる活動は屋外において土壌に触れる自然体験の一部としても位置づけられている。乳児を対象とした活動で用いられる小麦粉や片栗粉、米粉、寒天等をつかった感触遊びは、土や砂の遊びと同様に、心理的欲求などの精神衛生や無目的な遊戯的活動へ発展しやすい側面を持っている。幼児期の造形活動では、この「遊び」としての体験が、材料へ興味や関心を持ったり、手で触れたり全身で関わることでその材料の性質理解や扱い方を自分なりに工夫したり、活動を展開していく可能性が生まれる。

乳幼児期の粘土を用いた表現活動は、描画や工作を中心とする活動と比較すると研究事例が少ないと指摘する論考が散見される。こうした状況の背景には、新井ら（1970）が指摘するように、設備や準備に伴う困難、指導法の未開発、評価の研究において作品処理に伴う困難を挙げている<sup>(2)</sup>。材料の扱いや管理における手間以外にも、実践の意義が十分に実践者に理解されていないということも要因と推測する。

## (2) 小学校図画工作における粘土指導の課題

小学校における粘土の活動の課題は、乳幼児の粘土の活動とどのように関連しているのだろうか。小学校低学年に開設されている生活科や図画工作の単元（図画工作においては、題材）には、幼児期から関連が感じられる作例が教科書に多数掲載されている。幼児期の表現と小学校の図画工作の指導の共通性において、降旗（2007）の保育所・幼稚園から高等学校までの造形担当教員を対象とした実態調査がある<sup>(3)</sup>。その結果、保育所・幼稚園と小学校のどちらにおいても教育の重点となっている事項は、子どもが造形表現の楽しさを味わうことが最も高い数値となっており、造形指導の基本的な捉え方としては一貫性が認められる。また子ども一人ひとりの思いや願いが表現できることも重視されていると述べていることから造形表現が人格形成の基盤である時期を起点として、造形活動を通して表現することの楽しさや面白さを味わう活動として位置づいていると解釈できる。

粘土を使った題材は、表現の楽しさを味わう活動という教科としての目標において、材料をもとにした造形活動である「造形遊び」と「絵や立体、工作等に表す活動」、「鑑賞」領域にもみられる。

「造形遊び」は、昭和52年の学習指導要領改訂において教科の内容に加えられた。粘土による活動は、粘土そのものがもつ粘性や触感、からだ全体をつかって構造的な遊びが展開できる題材として位置づいてきた。「造形遊び」の設置当初は、原初的な材料の触感を楽しんだり、偶発的な形の変化をきっかけに作るといった遊びの要素をもった活動として捉えられ、作品成果を重視する指導傾向への反省として、造形行為自体を注視し、作りたいもの思いついたり制作へ入る際に頭の中でイメージする活動、試行錯誤を繰り返しながら目的や造形的な価値を見出す活動として定着してきたと言えよう。

こうした背景において、乳幼児期と小学校における造形的な遊びの関連性について論じたものがある。栗山ら（2006）は、就学前の造形活動と小学校低学年の図画工作における「造形遊

び」の活動は表面的に類似していると捉えつつも、小学校図画工作の「造形遊び」は「造形」を土台にしていることに対し、幼児期の造形活動は「遊び」を土台としており、そこには非連続する部分があると述べている<sup>(4)</sup>。同様に、奥（2002）も、乳幼児期の探索活動において造形遊びに酷似した様相は見られるものの、学校教育制度の下に位置づけられた造形遊びは、教育内容であり保育現場での活動を同質と捉えることに誤解があると論じている<sup>(5)</sup>。小学校の「造形遊び」は高学年まで導入されており、児童の発達を踏まえた造形活動の展開が指導目標にも示されている。

「造形遊び」の目標に、場や空間の特徴を生かした表現や、友達と共同して取り組む活動、作ったものを鑑賞するという観点が含まれていることから明らかである。その一方で、中学年・高学年では造形遊びが十分に実施されていないということや、絵や立体、工作に表す活動では、児童が制作の過程に見通しを持てず、教師が理想とする作品を提示し指導している実態がある<sup>(6)</sup>。また、材料の特性から思いついたり、表したいことを児童が見つける手立てや支援が不十分であるという課題がある<sup>(7)</sup>。これは、「造形遊び」の授業の位置づけが指導者に十分に理解されていないことが要因として考えられる。

以上のことから、乳幼児期の造形活動における表現遊びは、小学校図画工作における「造形遊び」と異なる性質を持つ反面で、トライ・アンド・エラーを繰り返しながら、自分らしい表現により近づけていく低学年の造形活動は、乳幼児期の探索活動と連続性や共通性が見い出せる。造形遊びにおける粘土を材料とした活動は、児童が自己保有する粘土を用いることが多く、一人当たり500gから1kgと、扱う粘土の分量に上限があるため、自ずと制作物に制限があったり、個々の児童によって粘土の種類が異なるため協同的な活動では粘土が混ざらないように配慮している。土粘土等が地域素材として豊富にあり活用が見込める場合を除いて、粘土ならではのダイナミックな活動は保障されにくく、土粘土に触れる活動は全体の11.7%程度と少ないことが明らかになっている<sup>(8)</sup>。

平成29年の改訂版では、すべての教科目において育てるべく資質や能力を「知識及び技能」「思考力・判断力・表現力」「学びに向かう力、人間性」とし、すべての教科目に通底する視点として位置づけられた。また学習の方法として注視されるアクティブラーニング（「主体的・対話的で深い学び」）は、授業改善の方針として示されている。図画工作の学習は、こうした今日的な学習課題を踏まえ「何が身についたのか」という視点から学習者の学びの可視化をはかることが課題化され、近年はルーブリックなどのパフォーマンス評価を用いた研究動向が散見される。粘土を使った授業における子どもの評価は、活動経過を含んだ学習者の気付きや指導者の明確な学習目標の設定、子どもの活動の読み取りなどとも密接に関係していくと考えられる。

#### 4. 図画工作における粘土を材料とする題材間の関係性について

##### (1) 小学校図画工作の目標及び内容と粘土の活動について

平成20年告示の小学校学習指導要領<sup>(9)</sup>における図画工作の目標及び内容は、第1学年及び第2学年のように二学年毎に示されており、それぞれの学年においてA表現とB鑑賞、そして、この二つの領域において共通して働く資質・能力を〔共通事項〕として記している。A表現の内容は、さらに「造形遊び」の活動と「絵や立体、工作に表す」活動となっており、粘土を用いた活動は、教科書の作例で「造形遊び」と「立体、工作に表す」活動に見ることができる。また、B鑑賞の領域では、美術作品としての掲載も確認できる。表現活動で用いる材料や用具は、子どもの発達を踏まえて、弾力的に扱うことが記されており次の学年において扱うものを初歩的な位置づけとして当該学年に扱ったり、前の学年で体験したことを生かしながら繰り返し扱うことを指導上の配慮事項として定めている<sup>(10)</sup>。

したがって、粘土の活動においても粘土ペラなどは、低学年のみという限定された扱いにはなっておらず、どの学年の題材においても粘土活動に必要な用具として記載がされている。図画工作の教科書は、現在のところ日本文教出版（以下：日文と表記）と開隆堂出版（以下：開隆堂と表記）の二社からのみ発刊されており、ここに示されている題材の系統性に着目して分析を試みた。

使用する教科書と指導書は、平成20年告示の学習指導要領に準拠したものであり、乳幼児から繋がる粘土の種類と小学校低学年（第1・2学年）、中学年（第3・4学年）、高学年（第5・6学年）との関係を集約すると表1のとおりとなった<sup>(11)</sup>。

これらの題材配置と指導書における指導上の留意点を踏まえ、低学年から高学年までの粘土活動の特性をまとめると以下のとおりとなる。

##### ① 低学年の粘土活動の特徴

- ・材料の特徴である可塑性、触感を確かめながら、無目的な造形遊びとして展開している。粘土を丸める・のぼす・つなぐなど手指を使った操作や、土や砂については体全体を使った遊びの行為を通して表し方の広がり期待する題材となっている。
- ・粘土は、土粘土（造形遊び、絵や立体や工作に表す活動とも）、紙粘土、液体粘土（開隆堂）、軽量粘土、油粘土、土・砂（造形遊び）の利用がみられる。工作に関する活用では、紙（お花紙、厚紙、色紙、片面段ボール、紙コップ、紙皿など）との併用が見られる。砂や土は自然の材料という観点から生活科における単元においても近い内容のものがみられる。
- ・用具については、成形用具として、粘土板・粘土ペラ、竹串等がある。霧吹き（ペットボトルを含む）は、粘土の水分量を調節する際に利用されている。土や砂の活動では、シャベルやスコップ、バケツ、空き容器など土や砂を掬ったり、掘ったり、集める用途に用いられている。
- ・紙粘土については、絵の具による着色の作例は少なく、造形遊びにおいて液体粘土と合わせたものがある（開隆堂）。

表1 教科書掲載の作品例と粘土の種類による分類

幼稚園・保育所等			小学校								
3歳未満児 3～5歳児			低学年			中学年			高学年		
環境を通じた遊びにおいて様々な素材を体験			造形遊び	絵や立体、工作	鑑賞	造形遊び	絵や立体、工作	鑑賞	造形遊び	絵や立体、工作	鑑賞
小麦粉粘土											
片栗粉 (ダイラタンシー)											
寒天											
人工粘土	紙粘土		・とろとろえのぐでかく (1・2下、日 文 pp. 24-25) ※液体粘土 ・わくわくすごろく (1・2下、日 文 p. 38) ・のぼしてべったん (1・2上、開隆堂 p. 22) ・できわってかくのきもちいい! (1・2上、開隆堂 p. 23) ※液体粘土 ・くつつきマスコット (1・2下、開隆堂 p. 9) ・コロコロ大さくせん! (1・2下、開隆堂 p. 22) ・ピコリン星ゆめのステージ (1・2下、開隆堂 p. 38, 39)	・でこぼこはっけん! (1・2上、日 文 pp. 34-35) ・小さなびじゅつかん (1・2下、開隆堂 pp. 2-4) ・みんなのギャラリー (1・2下、開隆堂 pp. 40-41)	・すみですみか (3・4下、日 文 pp. 38-39)	・ハッピー小もの入れ (3・4上、日 文 pp. 36-37) ・まぼろしの花 (3・4下、日 文 pp. 16-17) ・トロトロ、カチコチ・ワールド (3・4下、日 文 pp. 28-29) ※液体粘土 ・カラフルねん土のお店へようこそ (3・4上、開隆堂 p. 10) ・小さな箱の物語 (3・4上、開隆堂 p. 15) ・タイヤをつけて出発進行!! (3・4上、開隆堂 p. 29) ・願いの種から (3・4下、開隆堂 pp. 34-35)		・想像のつばさを広げて (5・6下、日 文 pp. 8-9) ※液体粘土 ・いっしゅんの形から (5・6下、日 文 pp. 32-33) ※液体粘土 ・感じて考えて (5・6下、日 文 pp. 36-37) ※液体粘土 ・ドリームプラン (5・6下、日 文 pp. 44-45) ・12年後のわたし (5・6下、日 文 pp. 46-47) ・でこぼこ広場に絵の具が走る (5・6上、開隆堂 pp. 24-25) ※液体粘土 ・白の世界 (5・6下、開隆堂 pp. 26-27) ※液体粘土			
	油粘土		・ひもひもねんど (1・2上、日 文 pp. 16-17) ○ごちそうパーティーをはじめよう! (1・2上、日 文 pp. 28-29) ●いっしょにおさんぽ (1・2上、日 文 pp. 44-45) ●にぎにぎねん土 (1・2下、日 文 pp. 12-13) ●おもいでをかたちに (1・2下、日 文 pp. 28-29) ●ひみつのグアナゾ (1・2下、開隆堂 p. 20, 21)		・ねん土マイタウン (3・4上、日 文 pp. 46-47)						
天然粘土	泥	土粘土	・すなやつちとなかよし (1・2上、日 文 pp. 12-13) ・みてみて、いっばいつくったよ (1・2上、開隆堂 pp. 16-17)		・切ってかきだしくつけて (3・4上、日 文 pp. 12-13) ・立ち上がれ! ねん土 (3・4下、日 文 pp. 12-13) ・にぎって、ひねって、ひらめいて (3・4上、開隆堂 pp. 16-17) ・リズムにのって (3・4下、開隆堂 pp. 12-13)	・みんなのギャラリー (3・4上、開隆堂 pp. 40-41)	・心の形 (5・6上、日 文 pp. 20-21) ※ねん土をけずって ・使って楽しい焼き物 (5・6上、日 文 pp. 34-35) ・水の流れるように (5・6下、日 文 pp. 12-13) ・切ったねん土の形から (5・6上、開隆堂 pp. 10-11) ・なぞの入り口から… (5・6下、開隆堂 pp. 12-13)	・みんなのギャラリー (5・6上、開隆堂 pp. 42-43)			
	砂、土		・すなやつちとなかよし (1・2上、日 文 pp. 12-13) ・しぜんとなかよし (1・2上、開隆堂 p. 10) ・土って気持ちがいい (1・2下、開隆堂 p. 12)								

●は油粘土もしくは土粘土、○は紙粘土もしくは油粘土

## ② 中学年の粘土活動の特徴

- ・軽量粘土に色を練り込むことで形や色などの感じを捉える（〔共通事項〕との重なり）。
- ・紙粘土以外の素材として色画用紙や発泡スチロールなど竹ひご、ダンボールなど加工に抵抗感があるものとの組み合わせがある（カッターナイフなどの用具の利用がみられる）。
- ・粘土の量が1kgから2kg～3kgと使う分量が増えている。
- ・動物や植物など粘土の可塑性を生かした立体表現特徴があり、粘土に芯材を使う（ウレタンフォーム、針金）ことがあり、彫塑的な表現に触れる記述がある。

- ・粘土を台座から立ち上げる活動が見られる。
- ・粘土や土、砂を用いた作例は見られない。
- ・心象表現としての立体活動と日常的な用途に使えるような工作の活動に粘土が使われている。日常生活で使えるような粘土の使われ方は、飾り付けなども工夫についても触れられている。
- ・粘土を切ったりかき出すなどのへらの使い方やしっぴきを使った作例も見られる。のし棒や板作りについての試行的な活動は、5, 6年生の活動に繋げる題材として位置づいている。
- ・「小さな箱の物語」(開隆堂)や「ねん土マイタウン」(日文)は鳥瞰的な視点から風景を捉えるように、粘土でつくった空間全体を捉える題材が見られる。
- ・見たり聞いたりしたことから自由に想像し自分なりのイメージを広げて表現したり、自分の世界観を表現するような題材が低学年よりも散見される。
- ・液体粘土を布に付着させて形づくり表現する題材など、やや抽象的なイメージを伴う題材がある。

### ③ 高学年の粘土活動の特徴

- ・粘土を1つの塊として捉え、粘土に触れた印象や塊から形を掘り出すような活動が特徴としてあげられる。
- ・粘土は、木彫風粘土などの切削に適した、彫刻刀やピーラー、紙やすりなどを利用する題材がある(日文)。また焼成に耐えうるような焼き物用粘土(テラコッタ粘土、信楽粘土など)の扱いがある。液体粘土についても扱いが見られる。
- ・日用品として利用する工作の活動では、テラコッタ用粘土を用いた焼成の体験があり、ひもづくりや板作りの技法を用いている。
- ・用途や目的をもったものを作る活動は、中学美術に繋がる題材として位置づいており、使う人を想定した制作や制作手順を見通して表現することにも関連している。
- ・全体と部分の関係を捉えて表現する活動は、鳥瞰的な見方から作る中学年の作品の延長とも捉えることができる。
- ・鑑賞の視点として、使ってみた感想を述べることや他者との比較において、その良さを認めあうことが学習内容に含まれている。
- ・粘土の焼成においてガラスを用いて、熱で溶けた様子を水が流れるイメージに重ねて表現する題材が見られる(日文)。
- ・液体粘土を用いた題材があるが、布に液体粘土をしみこませて、布の形を変化された後に固まらせている。中学年の題材との比較では形の面白さや美しさなどから想起される(見立て活動)という点に指導事項となっている。
- ・工作に表す活動では、社会や環境について話しあいながら、模型として表現する題材がある。
- ・作品のアーカイブ化について、デジタルカメラやコンピュータによる記録を行いプレゼン

テーションする題材がある（日文「ドリームプラン」）。これについては、郷土の伝統・文化に関し社会問題にも目をむけて検討を行う道徳との関連が示されている。

## 考 察

低学年の粘土の特徴は、土と砂、粘土の遊びを中心とした活動を通して材料の基本的操作や性質の違い、用具の扱い方の特徴を捉えることにある。特に生活科との連関において戸外の活動とともに粘土ではなく、砂を用いながら体全体を使ったダイナミックな活動が造形遊びとして位置づいている。

また1・2年下（第二学年）では、紙粘土を使って立体的に表す活動が展開している。紙粘土の活動において、水分量を調節して液状にして使う題材が第一学年から第六学年まで見られる。水を加えた粘土の題材は、絵や立体に表す活動に位置づいていることから心象性や物語性が高い表現であるとともに、粘土に絵の具を混ぜ込むことで水のように変化する液体をイメージしながら、粘土が乾燥して固まることを見通して表現することと読み取ることができる。

油粘土の活動は、低学年から中学年にかけて掲載された題材数は少なくなっているが、高学年にかけて天然粘土（土粘土）の題材数は絵や立体、鑑賞領域において増えている。土粘土の活動は、中学年には平面的な表現から粘土を立ち上げる表現へ、高学年では粘土を焼成する作品づくりへと繋がっていく。また、土粘土を乾燥させたものを彫刻刀で削る題材も見られる。かつては軟石や人工大理石を彫るような、材料加工においてやや材質の抵抗感がある彫刻題材が教科書題材に見られたが、こうした題材は木材を除いて無くなってきている。粘土の題材には、肉付け（モデリング）による塊（マッサ）や量感（ボリューム）を生かした表現が多く、彫り（カービング）による表現は、かきだしペラを使う中学年の題材や高学年の題材に散見される。

## 5. 図画工作と他教科との横断的視点からの検討

図画工作で取り扱う粘土の題材を、天然・人工粘土という材料の違いで分けた場合、天然粘土は造形遊びから焼成を行う陶芸まで活用の幅が大きい。粘土の活動は、戦前の塑像、戦後の彫塑という名称が用いられてきた。特に明治期には粘土細工という教材で用いられ、手指の訓練を目的とするものであり美術教育とは関連性がないものであった。その後、昭和22年学習指導要領（試案）では、粘土細工は、粘土による表現として改められた。そこには「自然や人工物を観察し、表現する能力を養う」とされており、記憶や想像によって自然や人工物を表現する能力と写生により、自然や人工物を表現する能力として記されている<sup>(12)</sup>。

上野・梶田（1980）は、表現活動の基盤は自分を取りまく世界の観察が重要とし、これは科学教育の基礎的方法であると述べている<sup>(13)</sup>。また理科の観察学習は美術に繋がるものであり、繋げていく必要があると指摘する。また、鑑賞教育の題材として中国の漢、三国、六朝、随、唐の土偶が適しており、写実性や生活感がある作品は小学生に適したものと述べている<sup>(14)</sup>。



このように、粘土の活動は、他の学習内容と関連付けて学ぶことの意義や重要性は、今日の学習指導観と照らし合わせても、学習の捉え方に一貫性があると考えられる。

粘土の活動において、土粘土は、その素材の特性から自然との関わりが深いことは前述の通りであるが、平成29年告示の学習指導要領では、カリキュラムマネジメントとして教科間や学校種間のつながりを踏まえた教育課程の編成が課題として示されている。そこで、教科間の指導の関連性について学習指導要領を手がかりに検討を試みた。以下は図画工作の学習指導要領を基軸としながら、粘土の活動に関連すると思われる事項を表現と鑑賞に着目して、低・中・高学年のそれぞれの学年において対応する他教科とその指導内容<sup>(15)</sup>をもとに整理を行った(表2, 3, 4における下線部分は筆者によるものである)。

表2 低学年における教科目間の指導の繋がり

	図画工作	国語	生活科	道徳
教科目標	表現及び鑑賞の活動を通して、感性を働かせながら、つくります喜びを味わうようにするとともに、造形的な創造活動の基礎的な能力を培い、豊かな情操を養う。	国語を適切に表現し正確に理解する能力を育成し、伝え合う力を高めるとともに、思考力や想像力及び言語感覚を養い、国語に対する関心を深い国語を尊重する態度を育てる。	具体的な活動や体験を通して、自分と身近な人々、社会及び自然とのかわりに関心をもち、自分自身や自分の生活について考えさせるとともに、その過程において生活上必要な習慣や技能を身に付けさせ、自立への基礎を養う。	道徳教育の目標は、第1章総則の第1の2に示すところにより、学校の教育活動全体を通じて、道徳的な心情、判断力、実践意欲と態度などの道徳性を養うこととする。 道徳の時間においては、以上の道徳教育の目標に基づき、各教科、外国語活動、総合学習の時間及び特別活動における道徳教育と密接な関連を図りながら、計画的、発展的な指導によってこれを補充、深化、統合し、道徳的価値の自覚及び自己の生き方についての考えを深め、道徳的実践力を育成するものとする。
第1学年	(1) 進んで表したり見たりする態度を育てるとともに、つくります喜びを味わうようにする。 (2) 造形活動を楽しむ、豊かな発想をするなどして、体全体の感覚や技能などを働かせるようにする。 (3) 身の回りの作品などから、面白さや楽しさを感じ取るようにする。 A 表現 (1) 材料を基に造形遊びをする活動を通して、次の事項を指導する。 ア 身近な自然物や人工の材料の形や色などを基に思い付けてつくること。 イ 感覚や気持ちを生かしながら楽しくつくること。 ウ 並べたり、つないだり、積んだりするなど体全体を働かせてつくること。 (2) 感じたことや想像したことを絵や立体、工作に表す活動を通して、次の事項を指導する。 ア 感じたことや想像したことから、表したいことを見付け表すこと。 イ 好きな色を選んだり、いろいろな形をつくって楽しんだりしながら表すこと。 ウ 身近な材料や扱いやすい用具を手を働かせて使うとともに、表し方を考えて表すこと。 B 鑑賞 (1) 身の回りの作品などを鑑賞する活動を通して、次の事項を指導する。 ア 自分たちの作品や身近な材料などを楽しく見ること。 イ 感じたことを話したり、友人の話を聞いたりするなどして、形や色、表し方の面白さ、材料の違いなどに気付くこと。 (共通事項) (1) 「A表現」及び「B鑑賞」の指導を通して、次の事項を指導する。 ア 自分の感覚や活動を通して、形や色などをとらえること。 イ 形や色などを基に、自分のイメージをもつこと。	(1) 相手に応じ、身近なことなどについて、 <u>事柄の順序を考えながら話す能力、大事なことを後としないように聞く能力、話題に沿って話し合う能力を身に付けさせるとともに、進んで話したり聞いたりしようとする態度を育てる。</u> (2) 経験したことや想像したことなどについて、順序を整理し、簡単な構成を考えて文や文章を書く能力を身に付けさせるとともに、進んで書くこととする態度を育てる。 (3) <u>書かれている事柄の順序や場面の様子などに気付いたり、想像を広げたりしながら読む能力を身に付けさせるとともに、楽しんで読書しようとする態度を育てる。</u> A 話すこと・聞くこと (1) 話すこと・聞くことの能力を育てるため、次の事項について指導する。 ア 身近なことや経験したことなどから話題を決め、必要な事柄を思い出すこと。 イ 相手に応じて、話す事柄を順序立て、丁寧な言葉と普通の言葉との違いに気を付けて話すこと。 ウ 姿勢や口形、声の大きさや速さなどに注意して、はっきりした発音で話すこと。 エ 大事なことを落とさないようにしながら、興味をもつて聞くこと。 オ 互いの話を集中して聞き、話題に沿って話し合うこと。 (2) (1)に示す事項については、例えば、次のような言語活動を通して指導するものとする。 略 B 書くこと (1) 書くことの能力を育てるため、次の事項について指導する。 ア 経験したことや想像したことなどから書くことを決め、書くこととする題材に必要な事柄を集めること。 イ 自分の考えが明確になるように、事柄の順序に沿って簡単な構成を考えること。 ウ 語と語や文と文の続き方に注意しながら、つながりのある文や文章を書くこと。 エ 文意を読み返す習慣を付けるとともに、間違いないように気付き、直すこと。 オ 書いたものを読み合い、よいところを見つけて感想を伝え合うこと。 (2) (1)に示す事項については、例えば、次のような言語活動を通して指導するものとする。 略 C 読むこと (1) 読むことの能力を育てるため、次の事項について指導する。 ア 語のまとまりや言葉の響きなどに気を付けて音読すること。 イ 時間的な順序や事柄の順序などを考えながら内容の大体を読むこと。 ウ 場面の様子について、登場人物の行動を中心に想像を広げながら読むこと。 エ 文章の中の大事な言葉や文を書き抜くこと。 オ 文章の内容と自分の経験を結び付けて、自分の思いや考えをまとめ、発表し合うこと。 カ 楽しんだり知識を得たりするために、本や文章を選んで読むこと。 (2) (1)に示す事項については、例えば、次のような言語活動を通して指導するものとする。 略	(1) 自分と身近な人々及び地域の様々な場所、公共物などのかかわりに関心をもち、地域のよさに気付く、愛着をもつことができるようにするとともに、集団や社会の一員として自分の役割や行動の仕方について考え、安全で適切な行動ができるようになる。 (2) <u>自分と身近な動物や植物などの自然のかかわりに関心をもち、自然のすばらしさに気付く、自然を大切にしたり、自分たちの遊びや生活を工夫したりすることができるようにする。</u> (3) 身近な人々、社会及び自然とのかわりに関心を深めることを通して、自分のよさや可能性に気付く、意欲と自信をもって生活することができるようになる。 (4) <u>身近な人々、社会及び自然に関する活動の楽しさを味わうとともに、それを通して気付いたことや楽しかったことなどについて、言葉、絵、動作、劇化などの方法により表現し、考えることができるようにする。</u> (1) 主として自分自身に関すること。 (1) 健康や安全に気を付け、物や金銭を大切に、身の回りを整え、わがまをしないので、規則正しい生活をする。 (2) 自分がやらなければならない勉強や仕事は、しっかりと行う。 (3) よいことと悪いことの区別をし、よいと思うことを進んで行う。 (4) うそをついたりごまかしをしたりしないで、素直に伸び伸びと生活する。 2. 主として他の人々のかかわりに関すること。 (1) 気持ちのよいあいさつ、言葉遣い、動作などに心掛けて、明るく接する。 (2) 幼い人や高齢者など身近にいる人に温かい心で接し、親切にする。 (3) 友達と仲よくし、助け合う。 (4) 日ごろ世話になっている人々に感謝する。 3. 主として自然や環境などのかかわりに関すること。 (1) 生きること喜び、生命を大切にすることをもち。 (2) <u>身近な自然に親しみ、動植物に優しい心で接する。</u> (3) <u>美しいものに触れ、すがすがしい心をもつ。</u> (4. 主として集団や社会とのかかわりに関すること。 (1) 約束やきまりを守り、みんなが使おう物を大切に働く。 (2) 働くことのよさを感じて、みんなのために働く。 (3) 父母、祖父母を敬愛し、進んで家の手伝いなどをして、家族の役に立つ喜びを知る。 (4) 先生を敬愛し、学校の人々に親しんで、学級や学校の生活を楽しくする。 (5) 郷土の文化や生活に親しみ、愛着をもつ。	
第2学年				

第1学年及び第2学年は、体験すること（みる・触れる・感じる・想像する・気付く）と表現すること（造形遊び、立体的に表す、言葉・文章で表す）で分類することができ、主として国語、生活科、道徳との関連に着目したところ以下の特徴が挙げられる。

- ・粘土という材料に触れる行為は、砂・土に触れる造形的な遊び活動や立体で表現する活動において「自然に触れる」体験と関連を持つ。身近な自然に触れ感じたりする活動（道徳、生活科）を通して、美しさや気付く力や想像する力を育み（国語、生活科）、創造的に表現する。
- ・相手の気持ちを感じたり、身近なことで感じたことを言葉・文章で表現する活動（国語）は、造形的な表現活動における表現のきっかけや作品からの読み取りとの関わりがあると捉えることができる。
- ・郷土の文化に親しみや愛着を持つことは、陶芸などの地場産業が盛んな地域においては、生活に関連した学習題材として位置づく。文化や芸術にふれる活動は、文化的活動として特別活動にも位置づいている。

中学年（表3）では、低学年の国語や道徳に加えて、総合的な学習の時間、理科、社会が設定されており自然や社会との関わりが特徴として挙げることができる。理科において「自然に親しみ、見通しをもって観察、実験などを行い、問題解決の能力と自然を愛する心情を育てるとともに、自然の事物・現象についての実感を伴った理解を図り、科学的な見方や考え方を養う。」「身近に見られる動物や植物、日なたと日陰の地面を比較しながら調べ、見いだした問題を興味・関心をもって追究する活動」などである。加えて道徳においても「自然のすばらしさや不思議さに感動し、自然や動植物を大切にする。」という指導事項があり、理科教育と関連した学びの展開を図ることができよう。

一方、図画工作における表現から関連する他教科の学習という点では、子ども達の学びあいによる問題解決力の育成、目的を定めて計画的に取り組むことや、ものの見方や考え方を養う教科学習が横断的な学びへと展開している。学び方として、協働的に学ぶことを通して、他児の表し方や考え方に触れる機会においては、その違いやよさ、面白さを感じるという科目間の連続性が見られる。また、第一学年及び第学年で設定されている生活科における自然との関わりは、理科の問題解決の能力育成や総合的な学習に時間とともに、学び方や考え方の身につけて探求的に学ぶ姿勢の育成に繋がっている。鑑賞活動においても、友達と話し合いながら考え方・表し方の違いに気付くことに触れられているが、郷土を含む伝統や文化への親しみ、外国文化への関心という事項があり、教科書の鑑賞教材として、やきものや郷土玩具の土人形、ロダンの「考える人」などの掲載が見られる（題材名「開隆堂」）ことから関連性を持たせた指導が考えられる。

高学年（表4）の図画工作の表現領域では、「材料などの特徴をとらえ、想像力を働かせて発想し、主題の表し方を構想するとともに、様々な表し方を工夫し、造形的な能力を高めるようにする。」「表したいことに合わせて、材料や用具の特徴を生かして使うとともに、表現に適した方法などを組み合わせて表すこと。」のように、これまで経験してきたことを生かしながら目的や方法を考えて表現する事項があることから、見通しをもって追究する力の育成が重視

表3 中学年における教科目間の指導の繋がり

	図画工作	国語	総合的な学習の時間	理科	社会	道徳
教科目標			横断的・総合的な学習や探究的な学習を通して、自ら課題を見付け、自ら学び、自ら考え、主体的に判断し、よりよく問題を解決する資質や能力を育成するとともに、学び方やものの考え方を身に付け、問題の解決や探究活動に主体的、創造的、協同的に取り組む態度を育て、自己の生き方考えることができるようになる。	自然に親しみ、見通しをもって観察、実験などを行い、問題解決の能力と自然を愛する心情を育てるとともに、自然の事物・現象についての基礎を作った理解を固め、科学的な見方や考え方を養う。	社会生活についての理解を固め、我が国の国土と歴史に対する理解と愛情を育て、国際社会に生きる平和で民主的な国家・社会の形成者として必要な公民的資質の基礎を養う。	
第3学年	(1) 進んで表現したり鑑賞したりする態度を育てるとともに、つくりだす喜びを味わうようにする。 (2) 材料などから豊かな発想をし、手や身体全体を十分に働かせ、表現や工夫し、造形的な能力を伸ばすようにする。 (3) 身近にある作品などから、よさや面白さを感じ取るようにする。 A 表現 (1) 材料や場所などを基に造形遊びをする活動を通して、次の事項を指導する。 ア 身近な材料や場所などを基に発想しつづけること。 イ 新しい形をつくることともに、その形から発想したりみんなで話し合ったり考えたりしながらつづけること。 ウ 前学年までの材料や用具についての経験を生かし、組み合わせた、切つてつないで、形を変えたりするなどしてつづけること。 (2) 感じたこと、想像したこと、見たことを絵や立体、工作に表す活動を通して、次の事項を指導する。 ア 感じたこと、想像したこと、見たことから、表したいことを見付け表すこと。 イ 表したいことや用途などを考えながら、形や色、材料などを生かし、計画を立てるなどして表すこと。 ウ 表したいことに合わせて、材料や用具の特徴を生かして使うとともに、表し方を考えて表すこと。 B 鑑賞 (1) 身近にある作品などを鑑賞する活動を通して、次の事項を指導する。 ア 自分たちの作品や身近な美術作品や製作の過程などを鑑賞して、よさや面白さを感じ取ること。 イ 感じたことや思ったことを話したり、友人と話したりするなどして、いろいろな表し方や材料による感じの違いなどが分かること。 (共通事項) (1) 「A表現」及び「B鑑賞」の指導を通して、次の事項を指導する。 ア 自分の感覚や活動を通して、形や色、組合せなどの感じをとらえること。 イ 形や色などの感じを基に、自分のイメージをもつこと。	(1) 相手や目的に応じ、調べたことなどについて、筋道を立てて話す能力、話の中心に気を付けて聞く能力、進行に沿って話し合う能力を身に付けさせることともに、一人一人の話し方や聞き方について話し合う態度を育てる。 (2) 相手や目的に応じて、調べたことなどが伝わるように、段落相互の関係などに注意して文章を書く能力を身に付けさせるとともに、工夫をしながら書くこととする態度を育てる。 (3) 目的に応じ、内容の中心をとらえたり段落相互の関係を考えたりしながら読む能力を身に付けさせるとともに、幅広く読書しようとする態度を育てる。 A 話すこと・聞くこと (1) 話すこと・聞くことの能力を育てるため、次の事項について指導する。 ア 関心のあることなどから話題を決め、必要な事柄について調べ、要点をメモすること。 イ 相手や目的に応じて、理由や事例などを挙げながら筋道を立て、丁寧な言葉を用いるなど適切な言葉遣いで話すこと。 ウ 相手の話を聴いたり、言葉の抑揚や強調、間の取り方などに注意したりして話すること。 エ 話の中心に気を付けて聞き、質問をしたり感想を述べたりすること。 オ 互いの考えの共通点や相違点を考え、理由や根拠などの役割を果たしながら、進行に沿って話し合うこと。 (2) (1)に示す事項については、例えば、次のような言語活動を通して指導するものとする。 略 B 書くこと (1) 書くことの能力を育てるため、次の事項について指導する。 ア 関心のあることなどから書くことを決め、相手や目的に応じて、書く上で必要な事項を調べること。 イ 文章全体における段落の役割を理解し、自分の考えが明確になるように、段落相互の関係などに注意して文章を構成すること。 ウ 書くことすることの中心を明確にし、目的や必要に応じて理由や事例を挙げて書くこと。 エ 文章の間違いを正したり、よりよい表現に書き直したりすること。 カ 書いたものを発表し合い、書き手の考えの明確さなどについて意見を述べ合うこと。 (2) 略 C 読むこと (1) 読むことの能力を育てるため、次の事項について指導する。 ア 内容の中心や場面の様子がよく分かるように音読すること。 イ 目的に応じて、中心となる語や文をとらえて段落相互の関係や事実と意見との関係を考え、文章を読むこと。 ウ 場面の移り変わりに注意しながら、登場人物の性格や気持ちの変化、情景などについて、叙述を基に想像して読むこと。 エ 目的や必要に応じて、文章の要点や細かい点に注意しながら読み、文章などを引用したり要約したりすること。 オ 文章を読んで考えたことを発表し合い、一人一人の感じ方について違いのあることに気付くこと。 カ 目的に応じて、いろいろな本や文章を選んで読むこと。 (2) (1)に示す事項については、例えば、次のような言語活動を通して指導するものとする。 略	(1) 物の重さ、風やゴムの力並びに光、磁石及び電気を働かせたときの現象を比較しながら調べ、見いだした問題を興味・関心をもって追究したりものづくりをしたりする活動を通して、これらの性質や働きについての見方や考え方を養う。 (2) 身近に見られる動物や植物、日なたと日陰の地面を比較しながら調べ、見いだした問題を興味・関心をもって追究する活動を通して、生物を愛護する態度を育てるとともに、生物の成長のきまりや体のつくり、生物と環境とのかわり、太陽と地面の様子との関係についての見方や考え方を養う。 (1) 空気や水、物の状態の変化、電気による現象や力、熱、電気の動きと関係付けながら調べ、見いだした問題を興味・関心をもって追究したりものづくりをしたりする活動を通して、これらの性質や働きについての見方や考え方を養う。 (2) 人の体のつくり、動物の活動や植物の成長、天気の様子、月や星の位置の変化を運動、季節、気温、時間などに関係付けながら調べ、見いだした問題を興味・関心をもって追究する活動を通して、生物を愛護する態度を育てるとともに、人の体のつくりと運動、動物の活動や植物の成長と環境とのかわり、気象現象、月や星の動きについての見方や考え方を養う。	(1) 地域の産業や消費生活の様子、人々の健康な生活や良好な生活環境及び安全を守るための諸活動について理解できるように、地域社会の一員としての自覚をもつようになる。 (2) 地域の地理的環境、人々の生活の変化や地域の発展に尽くした先人の働きについて理解できるように、地域社会に対する誇りと愛情を育てる。 (3) 地域における社会的現象を観察、調査するとともに、地図や各種の具体的資料を効果的に活用し、地域社会の社会的現象の特色や相互の関係などについて考える力、調べたことや考えたことを表現する力を育てるようになる。	1. 主として自分自身に關すること。 (1) 自分でできることは自分でやり、よく考えて行動し、態度のある生活をする。 (2) 自分でやろうと決めたことは、粘り強くやり遂げること。 (3) 正しいと判断したことは、勇気をもって行う。 (4) 過ちは素直に認め、正直に明るく元気で生活する。 (5) 自分の特徴に気付き、よい所を伸ばす。 2. 主として他の人とのかわりに關すること。 (1) 礼儀の大切さを知り、だれに対しても真心をもって接する。 (2) 相手のことを思いやり、進んで親切にする。 (3) 友達と互いに理解し、信頼し、助け合う。 (4) 生活を支えている人々や高齢者に、尊敬と感謝の気持ちをもって接すること。 3. 主として自然や崇高なものとのかわりに關すること。 (1) 生命の尊さを感じ取り、生命あるものを大切にすること。 (2) 自然のすばらしさや不思議さに感動し、自然や動物を大切にすること。 (3) 美しいものや気高いものに感動する心をもつ。 4. 主として集団や社会とのかわりに關すること。 (1) 約束や社会のきまりを守り、公徳心をもつ。 (2) 働くことの大切さを知り、進んでみんなのために働く。 (3) 父母、祖父母を敬愛し、家族みんなで協力して楽しく家庭をつくる。 (4) 先生や学校の人々を敬愛し、みんなで協力して楽しく学校をつくる。 (5) 郷土の伝統と文化を大切にし、郷土を愛する心をもつ。 (6) 我が国の伝統と文化に親しみ、国を愛する心をもつとともに、外国の人々や文化に関心をもつ。	
第4学年						

されている。これに関連性を持つ教科目と指導内容は、「目的や意図に応じ、考えたことや伝えたいことなどについて、的確に話す能力、相手の意図をつかみながら聞く能力、計画的に話し合う能力を身に付けさせるとともに、適切に話したり聞いたりしようとする態度を育てる。

表4 高学年における教科目間の指導の繋がり

	図画工作	国語	総合的な学習の時間	理科	社会	道徳	外国語活動
教科目間			・横断的・総合的な学習や探究的な学習を通して、自ら課題を見付け、自ら学び、自ら考え、主体的に判断し、よりよい問題を解決する資質や能力を育成するとともに、学び方やものの考え方を身に付け、問題の解決や探究活動に主体的・創造的に取り組む態度を育て、自己の生き方を考えることができるようにする。	・自然に親しみ、見聞をもつて現象、実験などを行い、問題解決の能力と自然を愛する心情を育てるとともに、自然の事物・現象についての実感を伴った理解を図り、科学的見方や考え方を養う。	・社会生活についての理解を図り、我が国の国史と歴史に対する理解と愛情を育て、国際社会に生きる平和で民主的な国家・社会の形成者として必要な公民的資質の基礎を養う。		・外国語を通じて、言語や文化について体験的に理解を深め、積極的にコミュニケーションを図ろうとする態度の育成を図り、外国語の音声や基本的な表現に慣れ親しませながら、コミュニケーション能力の素地を養う。
第5学年	(1) 創造的に表現したり鑑賞したりする態度を育てるとともに、つくりだす喜びを味わうようにする。 イ 材料などの特徴をとらえ、想像力を働かせて発想し、主題の表し方を構想するとともに、様々な表し方を工夫し、造形的な能力を高めるようにする。 ウ 鑑賞しのある作品などから、よさや美しさを感じ取るようにし、それらを大切にできるようにする。 【A 表現】 (1) 材料や場所などの特徴を基に造形遊びをする活動を通して、次の事項を指導する。 ア 材料や場所などの特徴を基に発想し想像力を働かせてつくること。 イ 材料や場所などに進んでのやりかた、それを基に構成したり周囲の様子を考え合わせたりしながらつくること。 ウ 前学年までの材料や用具などについての経験や技能を総合的に生かしてつくること。 (2) 感じたこと、想像したこと、見たこと、伝えたいことを絵や立体、工作に表す活動を通して、次の事項を指導する。 ア 感じたこと、想像したこと、見たこと、伝えたいことを見付けて表すこと。 イ 形や色、材料の特徴や構成の美しさなどの感じ、用途などを考えながら、表し方を構想して表すこと。 ウ 表したいことに合わせて、材料や用具の特徴を生かして使うとともに、表現に適した方法などを組み合わせて表すこと。 【B 鑑賞】 (1) 鑑賞しのある作品などを鑑賞する活動を通して、次の事項を指導する。 ア 自分たちの作品、我が国や諸外国の美しいものある美術作品、暮らしの中の作品などを鑑賞して、よさや美しさを感じ取ること。 イ 感じたことや思ったことを話したり、友人と話し合ったりするなどして、表し方の変化、表現の意図や特徴などをとらえよう。 【共通事項】 (1) 「A 表現」及び「B 鑑賞」の指導を通して、次の事項を指導する。 ア 自分の感覚や活動を通して、形や色、動きや興行などの造形的な特徴をとらえること。 イ 形や色などの造形的な特徴を基に、自分のイメージをもつこと。	(1) 目的や意図に応じて、考えたことや伝えたいことなどについて、的確に話す能力、相手の意図をつかみながら聞く能力、計画的に話し合う能力を身に付けさせるとともに、適切に話したり聞いたりしようとする態度を育てる。 (2) 目的に応じて、内容や要旨をとらえながら読む能力を身に付けさせるとともに、読書を通して考えを深めたりする態度を育てる。 【A 話すこと・聞くこと】 (1) 話すこと・聞くことと能力を育てるため、次の事項について指導する。 ア 考えたことや伝えたいことなどから話題を決め、収集した知識や情報を関係付けること。 イ 目的や意図に応じて、事柄が明確に伝わるように話の構成を工夫しながら、場に応じた適切な言葉遣いで話すること。 エ 話し手の意図をとらえながら聞き、自分の意見と比べるなどして考えをまとめること。 オ 互いの立場や意図をはっきりさせながら、計画的に話し合うこと。 (2) (1)に示す事項については、例えば、次のような言語活動を通して指導するものとする。 略 【B 書くこと】 (1) 書くことと能力を育てるため、次の事項について指導する。 ア 考えたこととこれから書くことを決め、目的や意図に応じて、書く事柄を収集し、全体を見通して書くこと。 イ 自分の考えを明確に表現するため、文章全体の構成の効果を考えること。 ウ 事実に感想、意見などを区別するとともに、目的や意図に応じて簡単に書いたり詳しく書いたりすること。 エ 引用したり、図表やグラフなどを用いたりして、自分の考えが伝わるように書くこと。 オ 表現の効果などについて確かめたり工夫したりすること。 カ 書いたものを発表し合い、表現の仕方に着目して助言し合うこと。 (2) (1)に示す事項については、例えば、次のような言語活動を通して指導するものとする。 略 【C 読むこと】 (1) 読むことと能力を育てるため、次の事項について指導する。 ア 自分の思いや考えが伝わるように音読や朗読をすること。 イ 目的に応じて、本や文章を比べながら読み取る能力を工夫すること。 ウ 目的に応じて、文章の内容を的確に押さえて要旨をとらえたり、事実と感想、意見などとの関係を理さず、自分の考えを明確にしながら読みとらえること。 エ 登場人物の相互関係や心情、場面などの描写をとらえ、優れた叙述について自分の考えをまとめること。 オ 本や文章を読んで考えたことを発表し合い、自分の考えを広げたり深めたりすること。 カ 目的に応じて、複数の本や文章などを進んで比べて読むこと。	(2) 植物の発芽から結実までの過程、動物の発生や成長、流水の様子、天気の変化を条件、時間、水量、自然現象などに目を向けながら調べ、見いだした問題を計画的に追究する活動を通して、生命を尊重する態度を育てるとともに、生命の連続性、流水の働き、気象現象の規則性についての見方や考え方を養う。	(1) 我が国の国土の様子、国土の環境と国民生活との関連について理解できるようにし、環境の保全や自然災害の防止の重要性について関心を深め、国土に対する愛情を育てるようになる。 (2) 我が国の産業の様子、産業と国民生活との関連について理解できるようにし、我が国の産業の発展や社会の情報化の進展に関心をもちようとする。 (3) 社会的事象を具体的に調査するとともに、地図や地球儀、統計などの各種の基礎的資料を効果的に活用し、社会的事象の意味について考える力、調べたことを表現する力を育てるようになる。	1. 主として自分自身に関すること。 (1) 生活習慣の大切さを知り、自分の生活を見直し、節度を自ら節制に心掛ける。 (2) より高い目標を立て、希望と勇気をもってつけないで努力する。 (3) 自由を大切に、自立的で責任のある行動をする。 (4) 誠実に、明るく心で楽しく生活する。 (5) 真理を大切に、進んで新しいものを求め、工夫して生活をよりよくする。 (6) 自分の特徴を知って、悪い所を改め、よい所を積極的に伸ばす。 2. 主として他の人とのかわりに関すること。 (1) 時と場合をわきまえて、礼儀正しく真心をもつて接する。 (2) だれに対しても思いやりの心をもち、相手の立場に立つて親切にする。 (3) 互いに信頼し、学び合って友誼を深め、男女仲よく協力し助け合う。 (4) 謙虚な心をもち、広い心で自分と異なる意見や立場を大切にすること。 (5) 日々の生活が人々の支え合いや助け合いで成り立っていることに感謝し、それにかたえる。 3. 主として自然や崇高なもののかかわりに関すること。 (1) 生命がけがけのないものであることと知り、自然の生命を尊重すること。 (2) 自然の偉大さを知り、自然環境を大切にすること。 (3) 美しいものに感動する心や人間の力を越えたものに對する畏敬の念をもつこと。 4. 主として集団や社会とのかわりに関すること。 (1) 公徳心をもって法やきまりを守り、自他の権利を大切にし進んで義務を果たすこと。 (2) だれに対しても差別をすることや偏見をもつことなど、公平に、正義の実現に努める。 (3) 身近な集団に進んで参加し、自分の役割を自覚し、協力して主体的に責任を果たすこと。 (4) 働くことの意義を理解し、社会に奉仕する喜びを知って公共のために役に立つことをする。 (5) 父母、祖父母を敬愛し、家族の幸せを求めて、進んで役に立つことをする。 (6) 先生や学校の人々への敬愛を深め、みんなで協力し合いよりよい校風をつくること。 (7) 郷土や我が国の伝統と文化を大切にし、先人の努力を知り、郷土や国を愛する心をもつこと。 (8) 外国の人々や文化を大切にすることをもち、日本人としての自覚をもって世界の人々と親善に努める。	1. 外国語を用いて積極的にコミュニケーションを図ることができるよう、次の事項について指導する。 (1) 外国語を用いてコミュニケーションを図る楽しさを体験すること。 (2) 積極的に外国語を聞いたたり、話したりすること。 (3) 言語を用いてコミュニケーションを図ることの大切さを知ること。 【日本と外国の言語】 【日本と外国の文化について、体験的に理解を深めることができるよう、次の事項について指導する。】 (1) 外国語の音声やリズムなどに慣れ親しむとともに、日本語との違いを知り、言葉の面白さや豊かさを感じること。 (2) 日本と外国との生活、習慣、行事などの違いを知り、多様なものの見方や考え方があつたことに気付くこと。 (3) 異なる文化をもつ人々との交流等を体験し、文化等に対する理解を深めること。	
第6学年				(1) 燃焼、水溶液、電気と及び電気による現象についての要因や規則性を推論しながら調べ、見いだした問題を計画的に追究したりものづくりを通して、物の性質や規則性についての見方や考え方を養う。 (2) 生物の体のつくりと働き、生物と環境、土地のつくりと変化の様子、月と太陽の関係を推論しながら調べ、見いだした問題を計画的に追究する活動を通して、生命を尊重する態度を育てるとともに、生物の体の働き、生物と環境とのかわり、土地のつくりと変化のきまり、月の位置や特徴についての見方や考え方を養う。	(1) 国家・社会の発展に大きな働きをした先人の業績や優れた文化遺産について興味と理解を深めるようにするとともに、我が国の歴史や伝統を大切にし、国を愛する心情を育てるようになる。 (2) 日常生活における政治の働きと我が国の政治の考え方や我が国と関係の深い国の生活や国際社会における我が国の役割を理解できるようにし、平和を願う日本人として世界でいかに貢献できることを自覚できるようにする。 (3) 社会的事象を具体的に調査するとともに、地図や地球儀、統計などの各種の基礎的資料を効果的に活用し、社会的事象の意味について広い視野から考える力、調べたことを表現する力を育てるようになる。		

(国語)」「植物の発芽から結実までの過程、動物の発生や成長、流水の様子、天気の変化を条件、時間、水量、自然災害などに目を向けながら調べ、見いだした問題を計画的に追究する活動を通して、生命を尊重する態度を育てるとともに、生命の連続性、流水の働き、気象現象の規則性についての見方や考え方を養う。(理科)」を関係づけることができよう。

また、高学年では中学年で配置されている科目以外にも外国語活動の時間が配置されており、図画工作の鑑賞活動における「自分たちの作品、我が国や諸外国の親しみのある美術作品、暮らしの中の作品などを鑑賞して、よさや美しさを感じ取ること。」は、「(1) 国家・社会の発展に大きな働きをした先人の業績や優れた文化遺産について興味・関心と理解を深めるようにするとともに、我が国の歴史や伝統を大切にし、国を愛する心情を育てるようにする。(社会)」「(7) 郷土や我が国の伝統と文化を大切にし、先人の努力を知り、郷土や国を愛する心をもつ。(道徳)」「(8) 外国の人々や文化を大切にする心をもち、日本人としての自覚をもって世界の人々と親善に努める。(道徳)」「(2) 日本と外国との生活、習慣、行事などの違いを知り、多様なものの見方や考え方があることに気付くこと。(外国語の活動)」「(3) 異なる文化をもつ人々との交流等を体験し、文化等に対する理解を深めること。(外国語の活動)」との関係性を重視し、諸外国の作品に触れることで文化的特徴に気付いたり、自国の伝統文化の良さを確認することに繋がると考える。

このように、日常的な暮らしの中における、自然科学や歴史、文化、慣習等の学習ファクターに着目し、主体的に学習・理解の深まりを促すことが特徴となっている。調べることで、対象を比較したり違いが分かるなど、自分以外の人が残した痕跡などから想像し、関連性に気付くことを重視している。

## 考 察

図画工作における表現と鑑賞を考察の軸にして他教科の関連性を検討した結果、思ったことや感じたことを表現する力、筋道を立てて考え表現する力、他人の表現（意見）を参考にしたり踏まえて表現する力、目的に応じて表現する力といった表記に結びつくと考えられる。感性に基づいた自己表現という側面が図画工作における表現の特色として強く捉えられがちであるが、見方や考え方を含んだり、表現の効果（どのように他者から捉えられるか）ということも他教科と関連づけた学習が可能であろう。他方で、鑑賞との関わりでは、対象を意識する（気付く）ことや、対象や体験をどのような視点から捉えるかという点において、単に気付くだけではなく、興味を持って捉える・特徴を捉える・関連付けて捉えるというように読み取る力・解釈する力・応用的に捉える力として他教科に関係性を見出すことができよう。

とりわけ粘土の活動においては、身近な自然物に触れることから造形材料となることへの気付きや、自然への興味関心が、発想や構想とも関連し表現への意欲を刺激することがある。また、図画工作の特徴として、この情報理解が子どもの想像の世界と関連づいた様々な解釈として成立する。粘土の活動において、思い描いたことや想像したことを表現することは、平面及び立体といういずれの方法において実現しうる点は、描画活動と異なるところである。粘土に

おける題材との関連では、具体物の再現的表現（人、動植物、生き物等）と印象・イメージなどから想起される抽象的表現（○○のようなもの、こと）を自分なりの方法や捉え方で表現し楽しんだり、他者を意識したり、伝えることを目的として表現するという部分と大きく関連すると考えられる。

## 6. まとめ

平成29年告示の幼稚園教育要領・保育所保育指針・幼保連携型認定こども園教育・保育要領では、これまでの保育内容における五領域に加え、資質・能力の三つの柱を受けて「幼児期の終わりまでに育ってほしい姿」として示している。資質・能力における学力三要素は、小学校就学を見越した子どもの姿にも重なり、図画工作と繋がりがある領域「表現」では「豊かな感性と表現」の項目において「心を動かすできごとに触れ感性を働かせる中で、さまざまな素材の特徴や表現の仕方などに気づき、感じたことや考えたことを自分で表現したり、友達同士で表現する過程を楽しんだりし、表現する喜びを味わい、意欲を持つようになる」と示している<sup>(16)</sup>。乳幼児期における様々な活動における美的体験は「豊かな感性」を刺激し育み、思いつuitことや考えたことなどの気持ちを「表現」という行為で具現化することと解釈できる。

本研究では、乳幼児期から繋がる小学校の学びにおいて、粘土の活動を中心に発達を踏まえた体験の連続性として捉えると同時に、小学校においては教科横断による多面的な学びという課題から捉えることを目的とした。

乳幼児期における粘土に触れる活動は、砂、土、泥と同様に自然環境における可塑性の高い素材に触れる体験的活動であると同時に、ものの量の扱いについて理解を促す教材、可塑性や触感を楽しむものとしてこれまで扱われてきた。天然粘土の活動では「泥水遊び」「光る泥団子」、人工粘土の扱いでは「小麦粉粘土」「片栗粉スライム」「油粘土」「紙粘土」などの題材である。しかしながら、粘土の活動はその活動にかかる準備の手間や、服装の汚れ、アレルギーを持つ子どもへの配慮等の諸課題を含んでいる。乳幼児に必要な活動であることの意義は理解されつつも、描画活動よりも実践や研究報告が進んでいるとはいえない状況である。粘土ならではの題材の意義や魅力を捉え直し、感触遊びの延長線上にカリキュラムの中で位置づけながら、体験が連続するように構築することも考えられる。

その中で、作品を鑑賞する活動は乳幼児期にどのように扱われているか（つまり、他児の作品に触れる活動がどのように位置づけられているか）、情報の獲得に係る活動としてしっかりと認識されているかということが今後の課題として明らかになった。作品からの読み取りや制作活動における思考過程を言語化し評価するという活動は、乳幼児期においては保育者による記録とその振り返りに頼るところが大きいため、実践を通して子どもの中に何が育ったかという点を検証していくシステムが必要となろう。

一方で、小学校図画工作における粘土の活動では、立体的な表現における造形材料として捉えがちなものの、粘土の活動における遊びの要素は、低学年において活動の類似性が認めら

れたが、学年が進行するにしたがって心象表現や工芸的な要素を含んだ学習と位置づいていることが明らかとなった。低学年においては砂・土に触れることが自然に触れることを目的とした生活科の単元に繋がるという捉え方や、総合的な学習の時間、国語、理科、社会、道徳等といった他教科との関連が課題となる中で、関連する単元において育つ力を共通の指標（コモンルーブリック）として検討し、教科の特性を越えた児童の育ちを捉えることも重要な課題となろう。

## 註

- (1) 粘土の定義は、粘性と可塑性をもつ天然産集合体とし構成粒子は土壌学では0.002mmよりも小さいもの、地質学では粒径1/256 mmを指すなど定義が異なる。造形表現における天然粘土は、しばし「土粘土」と表記する場合がある。本論では油土（油粘土）などの人工粘土と区別するため、天然粘土の表記に「土粘土」を用い、彫塑用粘土と同義とする。
- (2) 新井秀一郎 1970 「児童画と児童彫塑」東京学芸大学紀要 第5部門、芸術・体育
- (3) 降旗孝 2007 「教育現場における造形美術教育の実態と課題 ―山形県造形教育連盟実態調査からの考察―」山形大学紀要（教育科学）第14号 第2号
- (4) 栗山誠・武田信吾 2006 「幼児の造形活動と低学年図画工作科の現状比較 ―教育内容・方法の分析と、この時期の発達の特徴―」大阪総合保育大学 第1号
- (5) 奥美佐子 2002 「造形活動の初期的行為としての探索活動 ―造形遊びと比較検討する―」名古屋柳城短期大学研究紀要 第24号
- (6) 愛知県教育委員会 2014 「平成26年度 小・中学校各教科等教育課程研究協議会 報告書」愛知県総合教育センター 図画工作・美術部会 平成26年6月30日
- (7) 前掲(6)
- (8) 文部科学省 2011 「特定の課題に関する調査結果（小学校図画工作・中学校美術）」国立教育政策研究所 教育課程研究センター
- (9) 文部科学省 2008 「小学校学習指導要領解説 図画工作編（平成20年6月）」
- (10) 前掲(9)
- (11) 本文に掲載している表1は、日本文教出版及び開隆堂出版が発刊する平成27年度版教科書「図画工作」及び学習指導書に掲載されている資料（題材配列一覧）をもとに筆者が作成したものである。
- (12) 文部省 1947 「学習指導要領 図画工作編（試案）」
- (13) 上野省策・梶尾幸恵 1980 『粘土細工から彫塑教育へ』 明治図書
- (14) 前掲(13)
- (15) 本文に掲載している表2～4は、平成20年告示小学校学習指導要領 第2章から第5章を参考に筆者が作成したものである。
- (16) 「豊かな感性と表現」は、平成29年告示の「幼稚園教育要領」「保育所保育指針」「幼保連携型認定こども園・保育要領」のいずれにおいて同様の記載がなされている。

（受理日 2019年1月9日）